

説に訴ふるよりも、實地の上によりき指導を興へ得るならば、其の効殊に著大なのである。換言すれば、よき経験を經驗せしめるを最も有益とするのである。

子供の世話は詩の如き一面を具ふると共に、又甚だ現實なる一面を持つものである。一口に言へば、多くの勞苦と又面倒と、殊に非常なる忍耐を要することである。更に極言すれば、子供の爲に我を献げて奉仕せなければ出來ないことである。

其の勞苦と忍耐と而して犠牲と、我が精神の訓練の上に何たる貴くして幸なる經驗であらう。況んや母校の師君は、其の間に周到なる指導を興へて其の一日々々を自ら獨りして味ふよりも意味深き

ものたらしめらる。何たる活きた補習教育であらう。

世には、眞に自己を訓練せんが爲に、或は慈善病院の看護婦となり、或は白痴院の助手となり、以て自己の愛心を試み又之れを純化せんとする篤志家も稀ではない。高等女學校卒業者が、幼稚園に入つて勤勞に服する如きは、之等の人々に比して、敢て言ふに足らぬ容易さである。しかも、程度こそ違へ、得來る精神上の利益は、聊か相似たりとも言ふを得よう。

若し又、學校の指導施設完きを得て、之れに幼稚園保母たるの免狀を興ふるを得ば、又他の意味に於て好都合なる點も尠くない。

『ポール・ドンビー』(ヂッケンス) (三)

英文學に現はれたる子供 (二十一)

ビブチンさんは、殆一ケ年間ポウルとフロレンスとを預つた。その間に、二人は二回程歸宅したが、それもほんの四五日で、あとは父が毎週々々尋ねて来る度に、その旅館へ逢ひに行くと定まつてゐた。ポウルも、少しづつ、丈夫になつて、乳母車も不用な位になつた。併し瘦せて弱々しく、やはり、沈んで考へ事をする子供であつた。

或日、ドンビー君が不意にビブチンさんを訪問した。客間に遊んで居た子供連は、旋風のやうに二階へ追ひ上げられた。其處で、寢室の戸の烈しく閉まる音や、彼方此方を踏みあるく足音や、ビザストンがビブチンさんに打たれる響やら聞こえたあとで、ビブチンさんは静々と應接間に現はれた。ドンビー君は、ポウルも、はや満六歳に近くなつたので、他人に劣らぬ程に學問を仕込んで、將來自分の後を嗣ぐ大實業家に仕立て上げなくてはならぬから、ビブチンさんの學校を止めて、近くのプリンパー博士の學校へ入學させる所存である

が、あのやうに、慕ひ切つて居る姉から、急に離しても宜くあるまいから、フロレンスはビブチンさんの處へ置いて、最初半ケ年間、ポウルが毎土曜に、姉の許へ遊びに来るやうにする考だと告げて尙、ビブチンさんには、間接に、ポウルの教育上の監督者の位地に立つてゐてもらひたいと頼んだ。ビブチンさんは、反對のしやうもなく、一々尤らしい挨拶をしたので、ドンビー君は、流石、女教育家だと、その意見に感心したり、その利慾の念の薄いのを賞めたりして、得々と族館へ戻つて行つた。

さて、プリンパー博士の學校といふのは、なか／＼骨の折れる學校で、ブ博士は、生徒の數を十名と限つて居るが、百名に教へる程の材料を、その十名の頭腦に詰め込むのが職務であり、又快樂であると心得てゐるのであつた。此學校は、例へば無理にでも花を咲かせやうと仕掛けのしてある大きな温室見たやうなもので、此處の生徒は、皆

早咲きがして、早く實が生つてしまつた。それも結構だといはゞいはれるが、無理な細工には不利も伴ふわけで、季節外れの成果は、味も悪く早く駄目になつてしまふ。此處の生徒にツーツといふ、頭の馬鹿に大きい、鼻の脹れてゐる青年がゐるが、十名中の最年長者で、あらゆる學科を仕込まれた結果、花も咲かず、實も結らず莖ばかりになつて、まだ在學してゐた。世間では、ブ博士があまり手を掛けすぎたから、この青年は、鬚が生える時分には、頭腦がどこかへいつてしまつたのだと評してゐた。

此學校の玄関に、或日、ポウルは立つた。一胸を轟かせながら、右の手は緩く父の手に、左の手は、しつかり、フロレンスのに掴まつて、

「ポウルや、此處で勉強するとね、今に立派な店の主人になつて、御金が儲けられるよ。御前も、やがて、ちぎに一人前になるからね。」

とドンビー君は、案内を乞ふ暇に、ポウルに云

つて聞かせた。

「え。もう直き。」と答へたポウルのませた、萎びた顔付には、ドンビー君も不安の念を起こさずには居られなかつたが、取次が出て來たので、長くその方に心を止める暇がなかつた。一行四人（ピブチンさんも一所に來たので）内へ請せられた。

プリンパー博士は、威嚴しい書齋に、地球儀を左右に控へ、書籍に取り巻かれて、坐つて居た。挨拶をしながら、博士はポウルを見やうとしても、その席からは書物に遮られて、一向に目に入らないので、幾度も机の横手から覗こうとしてゐる様をドンビー君が悟つて、ポウルを抱き上げて、室の中央の机の上に博士と相對するやうに、腰を掛けさせた。

「はあ！、やつと見えました。どうですか、坊ちゃん。」

と、博士は胸に手を當て、反り身になつて言つた。

廊下の時計が「坊ちゃん、どうです。坊ちゃん、どうです」と繰り返しく言つてゐるやうに、ポウルには聞こえたので、

「ありがたう。丈夫で御坐います。」とポウルは博士にも、時計にも答へた。

「はあ！、立派な人間にして上げますかね。」

ポウルが黙つて居るので、

「ポウルや、どうだ、解つたかい。」と、ドンビー君が言ひ添へた。

「立派な人間にして上げませうかね。」と博士は繰り返した。

「子供でゐた方がよい。」とポウルは答へた。

「へーい。何故ですか。」

ポウルはで、いろいろの胸の思を堪へて居るといふ顔付をして机の上から博士を眺めて坐つて居た。而して、湧き出る涙を抑へる積りか、片手で膝を叩いて、もう片方の手を少しづつ、身體から離して、だん／＼に、フロレンスの方へ伸して、

終にその肩へつかまつた。「その理由は之」といはぬばかりに、其と同時に、ポウルは引縮まつてゐた顔付を崩して、慄へて居た唇をゆるめて、泣き出した。

「ビブチンさん。こんなでは困りますな。」と不興氣にドンビー君が言つた。

「こちらへ離れていらつしやい。フロレンスさん。」とビブチンさんが言つた。

「其儘にして御置きなさい。」と博士はビブチンさんを押し返すやうに、頷いて「捨て、御置きなさい。おぎに氣が轉するやうに致しますから。御子息さんは此處で御修業を……」

「え、どうか萬事御教育を願ひます。」とドンビー君は動せずと言つた。

「はあ！」と言つて、博士が目を半ば閉ちて、ポウルを見遣つたありさまは、手に入れた珍動物を、剝製にしようとする時の愉快さにも似て居た。「はあ！無論です。この御子さんにいろいろの智識を

授けて、成丈早く出来上るやうに一つ致しませう。學問は始めて、御出ですね。」

「宅で少しと、この夫人から少し手解をして頂いた他には、ポウルはまだ一向に學んで居りません。」とドンビー君が言ふと、ビプチンさんは急に堅くなつて、博士が自分を貶しでもするかと、鼻息荒く控へて居た。

ブ博士は、ビ夫人のやつてゐるやうな、人目にも付かぬ、内職教育は齒牙にもかけぬといふ態度で、手を揉みながら、頷いて、

「根本から始めるのは誠に好都合で。」といひながらポウルを横目に見、此場ですぐギリシヤ語のABCを持ち出して、ポウルを虐めたさうであつた。「其では此上御妨げをする必要もありませんから。」とドンビー君が立ち上らうとするのを、ブ博士は引止めて、

「失禮ですが一寸。妻と娘とを御紹介いたします。二人とも生徒の家庭的生活の方面を擔當してゐ

ますから。」

と、ブリンバー夫人とブリンバー嬢とを呼んで引合はせると、二人は、ドンビー君とビプチンさんとを連れて、寄宿舎の案内をすると出ていつた。取り残されたポウルは、やはり机の上に乗つて、フローレンスに手を曳かれて、恐る／＼博士の目を盗んで、室内を見廻して居た。博士は椅子に反り返つて、胸に手を當て、本を腕の限り引離して讀み初めた。

やがてドンビー君が戻つて来て、机の上のポウルの近くへ寄つて、

「では、お父さんは歸るから。」

「さやうなら。御父さん。」

その憂を含んだ顔に比べて、握手した手は極めて力ないものであつた。實際その悲しみの表情は父に對してはなく、只フローレンスの爲であつたのである。

「ちきに御父さんは來るから。土曜、日曜は御前も

御休みですからね。」とドンビー君はいった。

「え、土曜と日曜。」とボウルは言ひながら姉をのみ見て居た。

「よく勉強をして、賢くなるやうに。」

「え。」とボウルは大儀らしくいふ。

「もう直に大きくなるから。」

「え。」とボウルは答へて、亦老人めいた顔を見せた。

ドンビー君がいざ歸るといふ際に、博士も、夫人も、娘も一所に送り出た混雑で、ビプチンさんは、博士とブ嬢とに絡み合つて、その機勢に、フロレンスを取り残して、一人先へ書齋から出てしまつた。御蔭で、フロレンスはボウルの首にしがみ付く暇が出来、涙の中から微笑み／＼弟を見返つて最後に室を出た。

ボウルは、フロレンスが去つた時に、胸が一杯になつて、地球儀も書籍もぐる／＼轉回するやうに覺えた。急にそのぐる／＼が止まつたと思つた

ら、廊下の時計が「坊ちゃんどうです。坊ちゃんどうです」と前の如くに尋ねてゐるのが聞こえた。ボウルは、手を組んで、机の上で黙つて聴きながら、「淋しくて、悲しくて、」と答へたかつた。

博士の家族が玄關から戻つて來た。博士は、ボウルを机の上から下ろして、ブ嬢に引渡しながら、「この生徒は、初のうちは御前さんの受持ちにして置くから、精々と進ませなさい。進ませなさい。」と言つた。

ブ嬢はボウルに對つて、

「年はいくつ。」と尋ねた。

「六つ。」とボウルは答へながら、何故此婦人感男見たやうな威嚴い風をしてゐるのか、何故フロレンスのやうに髪を長く伸ばさないのかと考へてゐた。

「ラテンの文法をどの位習ひましたか？」

「ちつとも習ひません。」とボウルは言つたが、聴く人が呆れて居るのに氣が付いて、

「僕は病氣だったのです始終弱くて……毎日／＼
クラブと戸外にばかりゐたので、ラテン文法を
習へなかつたのです。……あのう。クラブに逢ひ
に来るやうにツて、そういつてやつて下さい。

「まあ何といふ下等な名！、下品なものにも程があ
る！、一體どんな化物なのです。」とプリンパー
夫人が言つた。

「化物ツてどれが。」ボウルは問ひ返した。

「クラブの事。」と夫人が汚りらはしさうに言つた。

「彼あれだつてあなたと同じで、別にかはつた化物で
はないんです。」

「何です！」と博士は怒鳴つた。

ボウルは吃驚し、怖れ戦むないたが、其でも不在の
クラブの味方をして、

「大變良い人なんです。始終僕の車を曳いて呉れ
たんで。深い海の事を、よく知つて居るんです
よ。海の中にある魚の事も、それから岩の上へ
日向ぼツこに来る怪魚の事も。その大きな魚が、

何かに驚くと、鹽を吹いて、而して何里も／＼
も響くやうな物音を立て、急いで水の中へ潜もぐ
つてしまふんですつて。それから又かういふ魚
もあるんです。」とボウルは、我を忘れて乗氣に
なつて、「丈たけの長い魚なので、僕は名を忘れまし
たが、姉さんは知つてゐます。その魚が死にさ
うな風をして見せると、人が氣の毒がつて傍へ
行くでせう。すると、大きな口を開けて、人を
呑まふとするのですつて。そういふ時に、人は
ね、」と大膽にも博士に對つて智識を授けにかゝ
る。「ぐる／＼方向を變かへて逃げるのです。する
と、その魚は丈が長いからよく身からだが曲らないで、
のろ／＼しか動けないから、しまひには負けて
しまふのです。クラブは、何故、海が死んだ
母さんの事を僕に思ひ出させるのだから、何を海
はいつても——いつでも言つてゐるのだから、そ
れは彼あれには解らないんですが、其でもいろんな
事を知つてゐますよ。あ、僕は。」と急に調子を

變へて、悲しさうな顔をして見馴れぬ三人の顔を佗しげに見て「グラフに逢ひに来てもらひたいナ。像はあれはよく知つてゐるし、彼も僕を知つてゐるに」

「はあ、之は困るナ。しかし稽古を始めたら宜からう。」と博士は首を振りながら言つた。

翌朝、ポウルは、三階の寢室で、一人で着物がよく着られないので、同室の二人の生徒に、紐を結んで呉れとか何とか頼んだのだが、甲乙ともに「うるさい」とか「ウン」とか生返事をしてゐるから、ポウルは階下へ降りて見たところ、若い女中が皮の手袋をはめて、フトーブを磨いてゐた。その女は、ポウルを見て吃驚りして、「御母様はどちら」と尋ねた。「母さんは死んでしまつた。」とポウルがいつたらば、女は手袋を脱つて、着物を着せてくれて、ポウルの手を揉み暖めてくれて、何でも着物の事で困つたら、「メリヤ」といつて御呼びなさい、といつて呉れた。ポウルは、禮をいつて、下の勉強

室へと、足音静に、ある室の前を通つたところが、「ドンビーさんか」と誰か聲をかけた。ブ嬢の聲だと思つて「はい」と答へた。

「御入りなさい。」といはれてポウルは室内へ入つた。

「私は之から保養運動コンステチューションにゆくのですよ。」とブ嬢がいつたが、ポウルには保養運動とは何物だか解らないので、そんなものが入用ならば、自分でゆかすに人を遣れば宜いと思つてゐたが、何とも挨拶をせずに、新しい書物が、高く積んであるのを注視してゐた。

「之はあなたの本なのですよ。」

「皆？」とポウルが訊ねた。

「え、私の思ふ通りにあなたが勉強すると、もつと澤山本を上げます。」

「ありがたう御座います。」

「私は保養運動にゆくのですから、其間にね——今から朝御飯までに、この本の中で私が印しるしを付

けて置いたところを明けて、今日の分がよくわ
けが解るかどうだか見て御置きなさい。愚圖愚
圖してゐては駄目ですよ。下へもつて行つて、
直ぐ御掛かりなさい。」

「はい」とボウルは答へた。

本の數が多いので、ボウルは一番下へ手をいれ
て、一番上に手と顎あごをかけて、一生懸命に抱へ込
んだのだが、室を出る迄に中程のが飛び出して、
其から全體が皆足許にドカと落ちてしまつた。

「あれ ドンビーさん。不注意ですね。」とブ嬢は
いつて、新規に積み直して呉れた。ボウルは、こ
んどは上手に釣合を取つて、室を出たが、階段はしこを
二三段ゆくと二冊落ちてしまつた。その余のは、
しつかり掴んでゐたので、もう二冊途中に落ちた
いけで、大部分を勉強室に運び了せた。それで、
こんどは落ちこぼれを集めに、又階上に戻つてい
つて、すつかり揃つたところで、自分の席に攀ぢ
上つて、勉強に取り掛り朝飯になるまで續けてや

つた。

食事が済んで、ブ嬢について二階へいつたら、
ブ嬢が「本はどうですか」と訊いた。

その本は、英語が少しと、ラテン語が可なりと、
文字論の片端と、古代史の始と、現代史の一瞥べっと、
度量衡の表が一つ二つ等であつたから、ボウルは
第二のを覚えると第一のを忘れ、頭の中では、人
の名が、目方の名とごつちやになり、文法も歴史
もいれませになつてしまつてゐた。

「これではまあ仕様がなない。」とブ嬢がいつた。

「あとう。時々グラブと話をする事が出来るよ、
もつとよく覚えられるンです。」とボウルは言つ
た。

「そんな詰らない事！、いけません。此處はグラ
ブなどの來る處ではないのです。では、本を
一冊もつていつて、今日の處をよく覺えたら、
次に移る事にしなくてはいけません。最初一
番上の本をもつていつて、よく出来るやうにな

つたら、私のところへいらつしやい。」

ポウルは、言付けられた通りに、一番上の本を取つて階下の室で勉強した。どうかするとすらすら暗記が出来、又どうかすると皆忘れてしまつたりしたが。大抵覺えたと思ふた頃に、ブ嬢の前へいつた。併し、先生に「さあ云つて御覽なさい」と言はれた途端には、ポウルは狼狽して、亦全體が頭腦の中から抜けてしまつたやうだつたのを、兎に角に終りまで暗誦し得たので、先生が賞めて、さあ次のに移つてと指圖した。かういふ風に、それから〜と晝飯までに四科目を濟せてしまつた。晝食後も、すぐ勉強なので、ポウルは頭が混雜して、茫然して勢がなくて厭でたまらなかつたが、他の生徒も、皆同様の氣分で居ながら、やはり本に向つて居なければならなかつたのだから、どうも免れる途はなかつた。夕食後も亦、練習やら翌日の豫習やらで暇がないから、就寝時間が來て、始めて休息安苦の安らかな思ひをするのであ

つた。

併し土曜日の嬉しさは、たとへやうが無かつた。フロレンスが必らず來てくれた。どんな天氣でも、又どんなに、ビブチンさんが文句をいつても、虐めても、フロレンスは必らず來てくれた。海邊へ二人でいつて、彼方此方逍遙しやうとも、又ビブチンさんの宅の、陰氣な奥の室で、姉に小聲で唱つてもらつて、その肩に倚れてうと〜しやうとも、爲る事や、ゆく場所はポウルに取つてはどうでもよいので、たゞ姉さんさへ一所なら宜いのであつた。

ある日曜の夕方、フロレンスは侍女のスザンを連れて、ポウルをブリンバー家へ送り込んで、歸つて來ると、やがて懷から、鉛筆で何か書いてある紙片を取り出して、

「スザン、之がポウルさんの學んでゐる本なのだよ。ポウルさんが疲れて出來なかつたからつて、よくお休み日に本を此處へ持つて來るだろう。」

昨夜そつと名を寫し取つておいたのだよ。」

「私になんぞ御見せになつても駄目で御座います。」

「この本を、明日、私に買つて来て御呉れ。御金はあるから。」

「まあ何で御座いますつて。本なんか山程御有りで、而して年百年中、先生達に何か教はつてお出のではありませんか。」

「この本を買つて来てくれるだろう。入用があるのだから、買つて来て御くれ。」

「え。よろしう御座いますが、何になさるので御座います。」

「その本を讀んで置いて、ポウルさんの手傳をするのだよ。そうすれば次の週ポウルさんが少しは樂だから。まあ私はやつて見たいの。ね、だから買つて来て御呉れな。御前の親切は忘れないよ。」

かういつて御金入を渡して、やさしく頼むフロ

ーレンスに對しては、どんな頑かたくな心の人だつて拒む事は出来ないの、スザンも答へもせず、御金を受取つて其足で買ひにいった。

フローレンスは、其本が来てからは、自分の日課が濟むとポウルの學課を一人でポツ／＼やつた。

元來利發な上に、弟を思ふ一心が加はつて、直きにポウルに追付き、果ては追越してしまつた。ピプチンさんには素より一言も話さず、フローレンスは、人が皆寢静まつて、暖爐の灰が冷たく白くなり、燈火が燃盡きさうな頃に、只獨り弟の身代りにと心を盡したのである。それで或土躍の夕、ポウルが勉強をするつて机に向つた時に、フローレンスが傍に居て、難むづかしい事を容やさしく話し代へてやり、暗いところを明るくしてやつた其時に、フローレンスは心に足るだけの報を得た！、ポウルは、始は驚きの眼を見張つたが、顔を赤めてニコツと笑んで、急に姉に飛び付いて、

「まあ姉さん！、僕は姉さん大好き／＼／＼。」と

いつた。

「私もポウルさん好き。」

ポウルは多く言はなかつたが、其晩中フロレンスの傍にピツタリ倚りそつてじつとしてゐて、床に就いてから三四度「よい姉さんだ〜」を繰り返した。

それからは、土曜の晩には、フロレンスが、

我國在來の玩具と恩物

ポウルの傍で、次の週に要しさうな事を、根氣よく教へてやるのが規則のやうになつた。姉さんが目を通したところだと思ふと、ポウルにも其處をするのが樂みになり、又實際に荷が軽くなるのでポウルはブ嬢の負はせる重荷の下に潰つぶされずに濟んだ。(續く)

幼児教育の一用具として玩具は廣く用ひられて

居ります。この玩具の適不適、豊富、貧弱は幼童心身の發達と密接な關係があり、時としては教師の働きより玩具の勢力が一層大なることもありま

す。夫故に適當なる玩具を澤山兒童に與へることは幼児教育には誠に大切なることであります。つ

きまして私の卑見を聊か申述べたいと存じます。

私は玩具は子供の爲に造られた物なれば危険な物の外は何んでも使用致させたいと思ひます。殊に從來の幼稚園恩物だけでは幼児のあらゆる心身活動をなさしめるには甚だ不足である。其多くは高尚な精神的作用を活動せしむる物が多いやうに思

大阪市西區本田
幼稚園保姆

三宅登茂子